

## 日本への侵攻—原爆以外の選択肢

著者：ジョン・レイ・スケイツ

出版：サウスカロライナ大学出版、1994年

書評者：デイヴィッド・リー

本年2025年は、第二次世界大戦終結の80周年になる。ロシア、中国、アメリカ、イギリス等の戦勝国は、盛大な祝賀を行った。対照的に、敗戦国では祝典は行われなかつた。ドイツではV-E Day（ヨーロッパにおける勝利の日）は、厳肅な公的追悼の日となつた。日本では、1945年7月26日に出されたポツダム宣言を受諾した8月15日を終戦記念日として、第二次世界大戦の軍人および民間人の戦没者を追悼している。

アメリカ人はまた、1945年8月を日本に対する限定的核戦争を記念して祝つた。なぜならば、この核使用が日本の降伏を余儀なくしたと繰り返し伝えられて來たからだ。更に、日本に対する核攻撃以外の唯一の選択肢は、陸海空からの日本本土への直接攻撃で、もしこの攻撃が実行されていたならば、アメリカ側に百万の犠牲者が出でていたであろうと教えられてきた。アメリカ人はまた、熱狂的自己犠牲型日本人の文化を考察すれば、広島、長崎への核攻撃は「正しい選択」であったと思わされてきた。それによつてアメリカ人の大量殺戮を避けられたばかりではなく、日本国民を救うことができたのだから。南ミシシッピ大学歴史学名誉教授ジョン・スケイツ（1934-2009）は、次のように指摘する。実現したことのなかつた出来事ではあるが、計画されていた日本の本土へのアメリカ軍による陸海空の攻撃は「対日戦争を終わらせる」手段として、広く理解されていた。

スケイツの著作は、このテーマについて詳細に英語で書かれた最初の本である。そのスケールにおいて、ノルマンディー上陸作戦をちっぽけなものにしてしまうほどのスケールのアメリカ軍陸海空攻撃作戦の計画、準備を詳細に論じるばかりではなく、そのような攻撃に対する日本軍の計画や防衛体制も現実的に評価している。スケイツはまた、相当な頁を使って、米軍作戦立案指導部の人間ドラマ、例えば、太平洋艦隊司令官チェスター・ニミッツ元帥と太平洋陸軍司令官ダグラス・マッカーサー元帥の対立する個性も浮き彫りにしている。

例えば、スケイツは、マッカーサーは”偏執病的気質があり、海軍は彼らの太平洋戦争から自分を締め出そうと画策し、自分を二次的、補助的役割に置き去りにしていると信じていた。日本本土への侵攻が必要か否かについては、首脳陣の中で意見が分かれていた。マッカーサーは断固として日本への侵攻は実行すべきであるし、さらに自分が全体の総指揮官になるという意見だった。スケイツはニミッツを「愛想がよくて、控え目で自己主張しない」と描写している。マッカーサーとは対照的に、太平洋軍司令官達の動機に対して、偏屈でも、疑い深くもなかつた。日本への侵攻は必要ではないと最初はそう願い、おそらく信じていたが、

日本の海洋封鎖の効果によって、後になって考えを変え、マッカーサー側についた。

スケイツは見事な筆致で次々と詳細を説明している。アメリカ軍が日本に侵攻したら塹壕で防衛している日本兵に対して毒ガスの使用を考えていたこと、そして輸入に依存する日本をさらに窮地に追い込むため、日本の稻作に除草剤を散布すること、そして、陸軍参謀長ジョージ・マーシャルは次のように引用されている。「あと9個原子爆弾があり、それらは日本本土南端への最初の上陸作戦のために準備されている。」それは、11月1日に予定されていた。爆弾のいくつかは、アメリカ軍兵士の到着の前に、侵攻地点で使用され、いくつかは「更に内陸部の防衛拠点、あるいは、海岸の上陸地点に移動しようとする反撃部隊に対して」使用されるであろう。

米軍の核兵器の使用に関しては、一般論として、日本がポツダム宣言を受諾する（つまり、日本軍全体の無条件降伏）ように勧告する選択肢は、日本本土侵攻か、核攻撃のどちらかであった。しかし、スケイツは次のように指摘する。「1944年中頃に、ペンタゴン（国防省）は日本侵攻構想を描いていたが、侵攻の最終計画や軍事行動を託されていた太平洋軍司令官のマッカーサーとニミッツを含む誰一人として、原子爆弾計画について何も知らなかつたし、彼らの任務として考えてはいなかつた。」

フランクリン・ルーズベルト大統領とウィンストン・チャーチル首相は、1943年1月のカサブランカ会議で、日本の「無条件降伏」を要求した。1943年半ばの計画の一環として、米軍統合参謀本部は、日本に対する英國の軍事計画を退けた。イギリス軍はドイツが敗北した後も、長くアメリカ軍がヨーロッパに駐留することを切望して、1947年に日本に対して連合軍としての作戦を思い描いていた。他方、米軍統合参謀本部は、米軍の戦争による疲弊と兵の士気を考慮して、VEデイ（ヨーロッパでの勝利の日）から12か月以内に、空爆と海上封鎖を併用した作戦を敢行し、もしこれらの作戦がルーズベルト最高司令官の求める無条件降伏を実現できなかつた場合には、最終的には日本本土侵攻もありうとした。実際、無条件降伏を戦略的妨害とみなしていた統合参謀長の間での、あるいは、ルーズベルト大統領を含む政治指導者達との激論にもかかわらず、「無条件降伏」は、日本の敗戦に関しては、連合軍の主要政策のままであり、統合参謀本部は、この政策を実現するための軍事戦略を構築しなければならなかつた。

興味深いことに、スケイツは、初期の米英合同対日戦争計画は、蒋介石軍との合同作戦と、更には、米、英、中による日本の侵攻も含んでいたと述べている。対日戦争における蒋介石の関与については、スケイツが述べているように、「イギリス軍は中国軍の能力や、戦意をほとんど信用していなかつた。」更に、1943年に、様々な事が起きたように、「蒋介石は、日本に対して地上戦の矢面に立てるとは到底思えなかつた。」かくして、「陥落作戦」、九州

（オリンピック作戦）と関東平野（宝冠作戦）を含む包括的侵攻作戦は、すべて米軍によって行われることとなった。

日本に対するアメリカの戦争計画は、1945年夏迄には概ね構想通りに進んだ。「日本では、産業と国民が差し迫った飢餓に直面していた。」米軍の絨毯爆撃によって「66の小都市の174平方マイル（およそ452.4m<sup>2</sup>）が消失し、推定330,000人が焼死した。」空から投下された魚雷が日本の海峡や港湾を運用不能とした。「海上輸送は絶望的だった。」日本は、海外派遣部隊への補給能力を失い、制空能力も失った。帝国海軍保有の戦艦のほとんどすべてが、1994年10月のレイテ湾海戦で失われた。封鎖と空爆が進む中で、たとえこれらが日本を「無条件降伏」へと動かさなかつたなら、その時は、「封鎖を強化し、空襲を激化するためのより多くの基地を確保するべく、南九州への侵攻が開始される。」

戦略的に希望のない現状と不可避の損失にもかかわらず、日本軍はルソン島と沖縄の防衛戦で敵方に多大な戦死者を与えることができた。特攻隊（いわゆる神風部隊）がより多くの米軍戦艦に体当たりした。米軍作戦立案者達は、アメリカ軍が日本により近づくにつれ、自軍の戦死傷者が増えていく事態に暗然となつた。

慣例的な考え方、つまり、アメリカ軍の陸海空からの攻撃に対抗する日本人の熱狂的気質は、究極的に百万人のアメリカ人を死亡させると、戦後の主張に基づいたものである。例えば、トルーマン大統領は日本本土への侵攻は、「米軍側だけで、百万もの戦死傷者を出したであろう」と主張した。スケイツによると、トルーマンはまた日本への侵攻によって、25万人の戦死傷者、更に50万のアメリカ人の命が奪われたであろうとも述べた。ウインストン・チャーチルも同様に、日本への侵攻で、50万のイギリス人の命が失われていただろうと主張した。

おそらくこれは、チャーチル得意の大言壯語であろう。（彼はまた、非白人種の人に対して、失礼な発言をしている。）1946年に予定されていた関東平野侵攻作戦である宝冠作戦の総司令官のマッカーサーは、初期の攻撃にイギリス軍5師団を投入するという英軍の提案を退けた。その代わり、マッカーサーは英連邦（イギリス、カナダ、オーストラリア）軍3師団を提案した。これらの軍は、初期の攻撃には参加せず、予備軍とする。当時イギリス軍歩兵1師団は、約18,000の兵で構成されていた。当時の米軍作戦計画立案者は、連合軍の参戦申し出を、軍事的必然性ではなく、純粹に外交儀礼として受け入れていた。アメリカ軍指導者は、軍隊規律と軍需調達力の観点から、米軍と連合軍双方の大きな違いは、戦場と兵站の両方の現場で混乱を招くことになるだろうと述べている。

米軍の死傷者は、従来の経験に沿つたものになるであろう。戦争の末期に海外の戦場で日本

軍が繰り広げたような消耗戦においては、米軍作戦立案者達は、九州の侵攻によって、米軍はそれまでになかったような、例えば沖縄戦のように、作戦的余裕という戦術的優位性を持つことができる。戦死傷者の予測は「現実的で過去の経験に基づいたものであった」とスケイツは言う。マッカーサーの作戦計画者達は、合計 22, 576 人の死傷者がオリンピック作戦の最初の 30 日間で予測されるとした。

統合幕僚長達は、1945年6月18日の日本への侵攻についてトルーマンに説明することになっていた。トルーマンに死傷者の予測を示すように言われ、マッカーサーはオリンピック作戦の最初の 30 日で、50, 800 人の死傷者が予測されると答えた。(スケイツによると、マッカーサーは上方修正された数字の説明はしなかった。) トルーマンへの説明中、統合幕僚長達は、トルーマンが死傷者について尋ねた時、正確な数字の予測を拒否したと、スケイツは書いている。しかしながら、統合幕僚長達は、九州における最初の 30 日間の死傷者数は、「ルソン島で米軍が被った被害を上回るものではない」と述べた。ルソン島は大きさと地形が「九州に似ている。」ルソン島戦役では、37, 870 人の米側死傷者がいた。うち、13, 160 人が戦闘による死者で、2, 934 人が負傷により死亡した。説明の最後で、トルーマンは、「オリンピック作戦を決行する決定に同意した。」

オリンピック作戦や陥落作戦のすべてが、「100万人」の米軍死傷者をもたらしたかどうかは、知る由もない。この数字は当時の数字に基づいたものではなく、戦後に誇張されたものである。実際に、米軍が九州の陸海空攻撃を敢行していたならば、どのような局面になつていただろうか。

日本人は本土防衛については、ほとんど考えていなかった。スケイツは次のように述べている。南西および中部太平洋における米軍の侵攻と日本の軍事的損失を鑑みて、大日本帝国参謀本部が本土防衛の全体的検討を命じたのは、やっと 1944 年半ばになってからであった。防衛的作戦を計画することは「困難」であった。というのも、日本軍人、兵士は「攻撃的戦争のみを考えるよう訓練されていた」からだ。しかしながら、日本軍作戦立案者達は、海岸線での防衛を想定し、米軍が日本本土に上陸拠点を構築するのを妨げるため、本土にあるあらゆる軍事力を総動員した。沖縄の陥落後、数多くの戦術的理由によって、九州が米軍の次の攻撃目標であると考えられた。九州の海岸線での日米両軍の兵による接近戦では、日本軍作戦立案者達は、米軍の空からの援助も軍艦からの砲撃も防ぐことができると考えた。更に、南九州の山地の多い地形は、日本軍の防衛に有利に働き、米軍の侵攻にとっては不利になるであろう。

スケイツが示しているように、戦争終盤の日本の防衛体制は到底楽観できるものではなかった。日本軍要塞の構築は 1944 年秋に始まったばかりだったが、鉄とセメントの供給は

不足していた。計画された防衛体制の構築は、終戦まで未完成のままでいた。本土防衛のため、日本軍上層部は、200万人を動員しようとした。動員は1945年に始まった。米軍による絨毯攻撃と海上封鎖によって、動員は既に後退していた日本の兵站業務と供給網を逼迫させた。兵力に関してスケイツは「部隊によっては、武器も適切な訓練も与えられないまま、応召した。」更に、部隊内の団結と部隊間の連携に欠かせない熟練した将校や専門官の数も不足していた。スケイツによると、ある日本軍幹部将校は、最終の動員に応召した兵の大半は、訓練も受けていない不慣れな者か年寄りだったと述べている。当時の日本の海軍力の大半は、太平洋の藻屑となっていたか、破損していた。あるいは、燃料不足のため稼働できなかつたかであった。運用可能ななけなしの航空機や戦艦は、日本軍作戦立案者が思い描いた「最後の破壊的な一撃」のために温存されていた。つまり、大掛かりな神風特攻隊によるアメリカ侵攻軍への攻撃のために。

実際、日本軍立案者は、「一万機を（九州への）米軍侵攻に際して使用できるはずだった。」小型高速船、小型潜水艇、人間ロケット、人間魚雷からなる部隊が米軍に対して動員される予定だった。戦後の記録を見ると、日本国内に当時、「1万機」の飛行可能な航空機があつたとは疑わしい。1945年までに、日本軍の航空機はその仕様において米軍の航空機より劣っていた。燃料不足のために、飛行訓練はほとんど行われなかつた。更に、米軍の空爆を避けるために、日本軍航空機は日本各地に分散配備されることになり、その上、無線の不足により、陸空の作戦間の連携が困難になっていたであろう。かくて、海上の米軍への「想定された大規模の神風攻撃」は、極めて困難になっていたであろうというのが、せいぜいのところである。

最後に、戦時の日本の軍国主義者や、現代のアメリカ人近代歴史研究家によって信じられているプロパガンダにかかわらず、米軍に対して、日本の民間人を武器として使用する軍事計画はなかつた。実際、スケイツは次のように指摘している。軍指導者達は、九州の戦場となり得る地域から民間人を疎開させる事を計画していた。しかし、疎開計画は、米軍による道路や通信手段の破壊のために、その上、日本国内の燃料不足のために、車両が使用できないことなどによって、ほとんど不可能になつた。山地の多い南九州からの移動は徒歩によるか、馬車によるしかなかつただろう。（日本軍にとっても、アメリカ軍に対峙するため、南九州に移動する際には、同様の困難に直面したであろう。）

スケイツが指摘し、主流派の歴史家達が繰り返し否定してきたもう一つのキーポイントは、日本の指導者達は、ポツダム宣言よりはるか以前に、戦争を終わらせようとしていたことだ。スケイツによると、「1945年の夏」、米国政府は、日本政府内の人々が戦争を終わらせようとしていたことを知っていたという。しかしながら、終戦に向けての交渉は非公式なものであり、日本政府が「認めたものでも許可したものでもなかつた。」スケイツは、日本の代

表団と、アメリカとスイスの代表団との会合を記録しているが、この時期には、そのほかの交渉や終戦を実現しようとする天皇自身の関与もあった。1944年初めに、日本政府内で、東条英機首相を更迭し、米国との和平を直ちに模索する内閣に交代するよう議論が起きた。1945年5月、日本の内閣では正式にソ連による和平の仲介を論じるようになった。ソ連とは5年間の不可侵条約を締結していた。6月、天皇は終戦の計画に黙って同意し、前外務大臣広田弘毅が駐日ソ連大使に和平の仲介役を打診した。しかし、日本には知らされていなかったが、ソ連はドイツが降伏して2～3か月以内に日本を攻撃することを既にルーズベルトと同意していた。

スケイツの本書は、実現することはなかったが、もし実現していれば史上最大の軍事作戦になっていたであろう作戦について、日米双方の対処状況を印象的に描写しているが、少なくとも一つ誤りがある。スケイツは、日本の外交暗号、アメリカでの暗号名「マジック」の解読は失敗だった、なぜならば、暗号が解読できておれば、真珠湾攻撃の計画が事前に明らかにされていただろうからと指摘する。実は、アメリカは暗号「マジック」を1940年9月に解読し、ルーズベルト本人を含むルーズベルト内閣の主要閣僚達は、解読された暗号文を読んでいた。例えば、真珠湾攻撃以前の交渉時に、アメリカは日本との妥協を放棄し、日本側は何らかの外交的打開の余地をアメリカ側から引き出そうとしていた。この間に、コーデル・ハル国務長官は、「野村吉三郎駐米大使が交渉の部屋に入ってくる前から、彼が何を考えているか通常私にはわかっている」と言った。解読された「マジック」電文には、万が一交渉が失敗するようなことがあれば、日本は外交関係を断絶すると明確に書かれていた。しかし、明確でないのは、もし軍の適切な人物にこの情報が伝えられていたならば、真珠湾攻撃の最初の一撃を警戒するように指示できたはずであったという事である。様々な動機、あるいは単なる無知が、情報収集の失敗の理由として挙げられているが、暗号「マジック」は、期待通りの役割を果たしたのだった。